

現在進行中の問題と結ぶ「集団自決」軍強制改竄問題

鳥山 淳

こんばんは、沖縄から来ました鳥山です。沖縄の大学でパートタイム教員をやっています。この何年かは『けし風(かじ)』という雑誌の編集の裏方をやっています。他では載らない沖縄の情報をいろいろ掲載していますので、お見知りおきください。

安倍の暴走がもたらした今回の教科書検定

今日(二九日)、沖縄では「県民大会」が開かれていました。参加者二万人という数はいま初めて知りましたが、今回の教科書検定問題がここまで大きな動きになるとは正直予想していませんでした。また理解できていない部分があります。超党派の県民大会というのは、九五年一〇月の少女暴行事件以来で、作ろうという動きは何回かあったのですが、ことごとく不成立でした。九五年以降、沖縄を超党派にさせないためのさまざまな政治が駆使されてきた結果でもあります。そういう中で突如、今回の超党派という動きになったということ、特に自民党関係者や保守的な団体がここまで活発に動いたのはどうしてなのか、もう少し時間をかけて見ていきたいと思っています。

超党派で二万人も集まり集会は大成功ですが、しかし手放して喜べる状況なのか。教科書の問題に対しては明確なメッセージを発することはできませんでしたが、沖縄戦の記憶というものを、はたして現在進行中の問題に結びつけられているのだろうか、二万人集まった人々の中で、どれだけの人が辺野古や高江を支援する立場にいるのか、支援したいと思っっているのか。そういうことを考えると、いろいろ心もとないわけです。

どうしたらその沖縄戦の記憶をいま起こっている問題、これから起こるだろう問題に結びつけることができるのだろうか。今日の報告の結論にし

ていきたいと思っっていますが、その前に検定問題について話します。ご存じの方も多いと思いますが、この「集団自決」は八二年、八三年にも検定で非常に大きな問題になりました。その時も沖縄では超党派の動きがありました。

最初は日本兵が住民を殺したことを記述させないという動きだった。それが沖縄県の動きで覆っていくわけですが、その過程で、当時の文部省が「住民虐殺」と「集団自決」の両方を書けと始めた。「住民虐殺」記述に「集団自決」を並記させ、住民の自発的な意志による「崇高な死」もあつたのだという文脈を示そうとした。

それに対して長期に渡る教科書裁判があり、結果は決して満足のいくものではありませんでしたが、判決は「集団自決」を「自発的な死」として美化することは到底できなということを示しました。文科省でも認めざるを得ない合意ができ上がったといったわけです。その後、この「集団自決」に検定意見はつけられることなくきたわけです。

ところが、今回の検定でにわかに「集団自決」記述が問題になり、日本軍による強制という文脈を一切はずし、軍の関与すらも曖昧な文体に変更されました。

今回の検定の動きは日本政府の、とりわけ安倍政権の暴走を象徴する出来事だったろうと思います。これまでの検定方針を覆すような説得力のある材料もないわけですから。もちろん、そこには岩波書店を相手にした「名誉毀損裁判」が挟まっているし、それと人脈的に繋がった動きであることも明白ですが、やはり今の日本政府、安倍政権のスタンスを抜きにしては考えられないことだと思えます。

この動きについて、たとえば有民法制や国民保護法との絡みで沖縄戦の記憶を消し去りたかったからだという説明がなされてきています。私もそ

うだとは思っていますが、ただ、それが計画的な一貫した政策方針としてあったのかというと、それはどうも違うような気がします。しかし、関係がないというわけではない。最初からそれらを密接にリンクさせる一貫した方針がないにもかかわらず、こういうタイミングで二つのことが起こってきている。政府の中枢から方針が伝えられなくても、結果として文科省の検定調査官は動いた。現場の担当者が政権の意思を汲んで動いてしまふというような事態です。この間の議論を見ていても、有事法制に向けた動きと沖縄戦の問題がどうリンクするのかがということは、漠然とは指摘されてきているけれどもまだクリアではない。それが今後どう繋がっていくのか丁寧に見ていく必要があります。今回の暴走が、もう少し計算された形で出てきた場合、一体どういうことになるのか。本当に恐ろしいのはこれからかもしれない。

集団自決と軍事機密

資料に二つの新聞記事を入れていきます。一つは、今年九月二十六日『朝日新聞』の記事で「倉庫撮った日本人拘束 米陸軍相模総合補給廠」。もう一つは、『琉球新報』の八月二十八日の記事「基地内の祭入れず 中東出身者ら『差別』と憤り」。これは、まさにいま進行中の話ですが、こういう問題に沖縄戦の問題をリンクさせて考えたい。同じ資料に、沖縄戦の当時の記録と証言があります。まず、こちらのほうから話をします。

軍事機密に関わる問題です。いまの教科書検定で問題になっている「集団自決」の背景を考える際に決定的に重要なのは、この軍の機密保持の問題です。今年の八月に高文研から大城将保さんの『沖縄戦の真実と歪曲』という本が出ました。いま見ていただいている資料は、七一年と七四年に発刊された『沖縄県史』という証言記録ですが、大城さんは、このころからずつと沖縄戦の記録化に関わってこられた方です。今回の岩波を相手にした裁判では、この『沖縄県史』から断片的に記述を抜き出し、隊長命令がなかったというこの論証に使われているものですから、そのことについても解説をしています。この大城さんも、なぜ集団自決が起こったのかということ論じています。隊長の命令があつたかなくなつたかということよりも遙かに大きな問題がそこに存在しています。

明確に「集団自決せよ」という命令があるのがなからうが、日本軍が住民にそれまで命じていたことは、捕虜になってはいけないということでした。その一番の理由は、軍の機密問題。日本軍は部隊の人員や配置、装備などが米軍に伝わることをもつとも恐れていた。沖縄の人々にとつて不幸だったのは、本来であれば民間人が知るはずもない軍事機密を否応なく知ってしまったことでした。日本軍は沖縄の島々で陣地を構築する際に、住民を多数動員しました。住民は日常の中で軍事機密を見聞きしてしまうし、日本軍もそのことを承知していたわけです。

資料の『琉球新報』(二〇〇七・六・二二)の連載記事は、林博史さんが



アメリカで調査された資料の紹介です。米軍が沖繩上陸後に入手した日本軍資料の英訳で、それをもう一度日本語に戻したものです。四四年一二月の資料で、この時期から日本軍が捕虜を経て機密事項が伝わることを非常に警戒していたことがわかる。「防諜の強化」が繰り返されています。この時、すでに沖繩の人々は日本軍の陣地構築に動員されていますから、この「防諜意識の強化」をいかにして民間人に徹底するかということが課題になっているわけです。ただし、民間人にこれを徹底するにも限界があり、ましてや米軍の管理下に入った後の住民たちをコントロールすることはできないわけですから、防諜対策を強化する一方で、いざという場合には自決せよということになるわけです。

それがどついつい事態を招いていったか。一つは「集団自決」で、それとセットで絶対に見落とすにはいけないのが、日本兵による虐殺です。

たとえば、岩波の裁判。慶良間諸島の二つの島の「集団自決」で、隊長が命令を下したのかどうか争点にされているわけですが、絶対に見落とすにはいけないことがこの争点の外側にあります。「集団自決」で生きのびた住民は、一旦米軍の保護下に入るわけですが、その人々はその後、沖繩戦が終結するまでに同じ島の中に潜んでいる日本兵に虐殺されているわけです。理由はスパイ行為です。この隊長はその虐殺に関しては指示を下しており、明確にその事柄について関わっているわけです。

米軍上陸まで日本軍と密接にかかわり、作業をともししてきた住民としては、捕虜になるなどという命令に従い「集団自決」で死んでいくか、そうでなければ日本軍にスパイ容疑で殺されていくか。結局、逃げ場のない戦場です。「集団自決」を命令したか否かということだけで、強制性を判断できるものではないわけではあります。

もう一つの資料は『沖繩県史』の一部です。ここに紹介した二点の証言は、あまり多くない例ですが、日本兵の立場から語っているものです。一つは海軍兵で、戦後復員して「住民虐殺」について語ったものです。「スパイ」というものは味方でも、猜疑心を起こす。(中略)この辺に残っておる人はみんな日本軍がスパイと見なしたとかいう話、それはですね、アメリカ

に情報取られるんです。どこにどついつい部隊があるとかね、隊はどこへ行つたとかね、あれは止むを得ないんですね、戦争するとですね、兵隊は非常に気が立つしね」。沖繩から出征した方の言葉ですが、軍隊の経験を踏まえた、素朴だけど率直な虐殺の見方をしています。

もう一人の方は、「集団自決」と虐殺が起こった慶良間諸島の渡嘉敷島の方です。沖繩戦を体験する前に中国で四年間戦闘に加わってきた方で、沖繩戦では「防衛隊」として動員されています。「防衛隊」ですから軍隊の一部として動く中で、島々の出来事を見聞きしているわけです。その方はどついついふうに話しています。「住民にやっつけていけない事が少なくありません。捕虜になられると、こちらの陣地や兵力が敵側にはれてしまう。軍隊にとつては、大変迷惑な話です。敵につれ去られていって、四、五日してから帰ってくる。こついつい事は明らかにスパイ行為をやっていると断定します。私は土地のものですから、事情に詳しいので、上官は私を側において取り調べをやる。罰するのは下の私です。私がやらなければ、又私自身も変な目で見られる。これが大変つらかったです」。こついつい形で、「集団自決」から生き残った方たちは虐殺されたわけです。

ですから、「集団自決」を問題にするのであれば、各地で発生した日本軍による住民虐殺を必ず視野にいれなければいけない。そして、その二つを結びつけるもつとも重要な問題が軍の機密保持、防諜、スパイ防止ということなんです。「集団自決」問題をこのように考えることによって、いままですに日本の中で起こっているある種の戦争状態にリンクさせることができるのではないと思っています。

現在の「軍事機密」への視線

そこで、最近の新聞記事です。八月二十八日の『琉球新報』。これは普天間基地で開かれた「フライトラインフェスト」という、住民に基地の一部を開放してお祭りに来てもらおうというイベントで、県内在住の中東国籍を持つ男性たちが入場を拒否され、明確な説明はなかったというものです。

記事は「日本人とみられる警備員に身分証明証の提示を求められ、男性は国籍などが記された運転免許証をみせた。その際、祭りに参加するために来たと説明したが、警備員は免許証を預かった上でいったん現場を離れ、数分後に戻ってきて『上からの命令』とだけ述べて男性らを基地内に入れなかったという。別の男性二人は数時間後に別のゲートから入ると、外国人登録証などをみせたが、そこでも入場を拒否された」となっています。米軍のなかで、中東出身者ということが何とリンクしているのかというのはいままででもないことだと思います。

もう一つの『朝日新聞』(二〇〇七・九・二六)の記事は、相模原の米軍基地です。こちらにも米軍主催の有料の音楽祭で、基地内の一角に人びとを招き入れるためのイベントです。そういうイベントの開放されている場所で、家庭用ビデオで倉庫撮影した人が拘束を受けた。二時間弱の拘束を受けてカメラは返されたがテープは戻されず、理由説明もなかったというものです。

この二つは、基地の一面をわざわざ開放して人びとを呼び込む場であったわけです。そういう場ですらこういう政治がすでに起こっている。つまり、基地の中は一種の戦争状態にあるわけです。こういうイベントの場ですらこういうことが起こっているわけですから、ひとたびこれが有事を宣告される局面になった場合、いったいどういふことが起こるんだらうか。そういうことを考えただけでも、本当に恐ろしい気がします。

今回の教科書の問題を六二年前の戦争の記憶だけで終わらせるわけにはいかないし、その戦争をどう伝えるかということだけに限るわけにもいかない。沖縄戦を伝えることはこの上もなく重要なわけですが、同時に、いま行われている戦争とどう結びつけるかということを考えなければいけない。そうでなければ、六二年前の出来事を伝えることの意味は半減してしまつてはないか、と思います。どんなに想像力をたくましくしても、六二年前の沖縄の戦場とまったく同じ事が起きるといふことは想定できない。だからといって、六二年前はこんなに悲惨であったがいまはもう起こらない、ということと終わるのであれば、沖縄戦を伝えることにはたして何の

意味があるのだろうか、ということですが。形は違つけど同じ本質をもったことがすでにいま起こっている。資料の記事だけをみても、そういう恐怖をおさえられない。沖縄戦の記憶はそういうことと関連させて考えていきたいと思っています。

「集団自決」という言葉について

最後に「集団自決」ということばについて触れます。沖縄ではこの言葉そのものについて議論があります。この言葉を使う場合もカッコ付きでいわゆる「集団自決」という言い方をします。最近では並記する形で「強制的集団死」という用語をつけたり、論者によっては、カッコ付きであっても殉国美談を作ってしまうので一切使うべきではないという批判もあります。「自決」というのは日本軍の論理であり、潔く死ぬというのがそもそも民間人の話ではないはずで、この言葉を民間人の死に当てることはめること自体がおかしいというのが批判の根底にあります。この批判には非常にもつともな点があります。しかし、だから使わないようにしようということですむのだからかという思いもあり、私はカッコ付きで「集団自決」という言葉を使うことをいまのところ選択しています。

日本兵が直に手を下さない形で住民が自ら命を絶つてしまったことは紛れもない事実なわけです。それが日本軍の強制によるものであることを私は絶対に譲れませんが、「集団自決」という言葉は、日本兵が立ち合っていないくても住民が自ら命をたつていったという、非常におどろおどろしい響き、その恐ろしさを喚起するという意味で力をもっていると思います。ですから、カッコ付きで、どういふプロセスのなかでそれが起こったのかを説明するという条件付きで、「集団自決」という言葉を使っていく意味があるのではないかと私は今のところ考えています。

(まとめ文責・編集部)

* 県民大会の参加者から本集会参加者に「二万人」との連絡が入り、鳥山さんへ伝わった。その後県民大会は、参加者一万人との主催者発表がなされた。